

ポジティブな側面に着目した死別体験の研究
ー 複数の死別体験をもつ 50 代・60 代の語りからー

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
佐々木 公子

本研究では、死別体験を機に新たに形成されたポジティブな視点に着目し、故人との関係と死別時の年齢による視点の現れ方の変化と、複数の死別を重ねることがどのような体験をもたらすのかについて検討した。

方法は、身近な他者と複数の死別体験をもつ 50 代と 60 代の男女 4 名を対象とした半構造化面接であった。逐語録を時系列順に要約した後に、特に印象深いと思われる故人を選定し、該当する語りから抽出された概念をカテゴリーに分類した。

主な結果は、以下の 3 点であった。第一に、ポジティブな視点は、故人に対する思いと自分の生き方について考える 2 つの視点に大別された。第二に、故人とより親密な関係にある場合や、40 代で死別を体験した時に、有意義な人生を過ごそうとする視点が現れる傾向にあった。第三に、死別を重ねることによる影響に言及した語りに着目した結果、死別体験を機に新たに形成されたポジティブな視点と、同様の視点が見出された。

本研究の結果から、ポジティブな心理的变化には 2 つの方向性を伴うことや、故人との関係や死別時の年齢により体験内容の質が異なる可能性と、死別を重ねることで、体験に伴う様々な思いが深まりをみせていくことについて考察した。今後の課題として、ポジティブな心理的变化に関わる要因や要因の影響度と、死別体験間の相互作用についての検討が挙げられた。